



5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6

ル4  
3979  
5

不林  
藏書

昭和二十七年三月十八日  
求

和州舊跡圖考同錄

第五卷 滋下郡

牟城宮

神功皇后陵

鷹環

高野

狹城池付樹化雜成

山城大和國境

佐紀山

成務天皇陵

孝謙天皇陵

日葉酢媛陵

夏

超昇寺付真如法親王事

念佛堂付清海法師○曼陀羅○香烟小佛

○洞小佛○廐乞事○善閑朝臣寺  
 菅原付菅原氏○菅原池事  
 菅原天神社  
 菅原伏見陵二基  
 伏見毘  
 事  
 靈山寺  
 唐招提寺付金堂歎迎○講堂彌勤○食堂  
 ○經藏○宵素堂○御觀堂○鑑真和尚  
 ○覺盛和尚○舍利子  
 新田郡親王陵  
 ○般若經會○万燈會○西院○東院○觀音  
 ○東塔○西塔○食堂○傳法院○鎮守八幡  
 社○佛跡石○黑荀○抱子堂○降面○戒真事  
 御在所  
 勝間因秋橋  
 藥園宮  
 赤橿基  
 矢田寺付地藏○滿果上人○小野篁事  
 槱櫻道場付觀音事  
 松尾寺付鎮守社事  
 羅城門  
 大塚  
 勝間因池

○洞小佛○廐乞事○善閑朝臣寺  
 菅原付菅原氏○菅原池事  
 菅原寺  
 田道間守墓  
 真福丘院付觀山能

東明寺

川上陵

西大寺付

四天王○觀音堂○愛染堂○塔礎

○真正菩薩○道場會○光明真言會○集

與○豐心丹○西大寺柳事

西隆尼寺

秋篠寺付香水井○後七日御修法○集真事

秋篠

高山八幡社

延喜式神名帳

外山里  
村國墓

和州舊跡考第五卷

流下郡

山塚國へゆりて大新國ハ南よりありあま乃き

ひはうさひめ村ぢちもるう乃くよあり

そぞくやぬせ乃くゆりとゆりてあら山越て山塚の

舊本の系をくわくもあり

又歴代流上郡春自内境代まさかくりて常良  
とそりりひりへ流上流下の郡たよる良よ  
こそゆくめ先へ平城宮又古跡よくく内若  
御元亨新書よとく良の古氣道觀これ  
乃而とも流下郡もあり

平城宮

平城えひ又ゆる御力文ともゆく  
記げ宮の氣の添

上野西の瀬下郡あり三代 実錄 うち御嶽星村ニ有る

御嶽星

而方八町あり今より奈良乃地の名のとまり柳平津  
宮乃盤籬えんりへ元明天皇御洞元年九月もがつより  
奉ありて奈良と巡幸じゆこうしもやと代て所行べ  
紀地きぢ船と駕籠あり十月伊勢太神宮おほつかみよりの  
車くるま代うづひ舟奉幣使へいひしの四色下大主おほぬしを  
一月當船とうぶんの車くるま六十余家とあよしたと行くも  
糸いととて布又糸いととと縫ひく後ご地じ祭まつりとせよせ候  
絶つれもあことありて同三年三月平津宮ひらつぐうよりま  
く海うみに御船みやふねの船ふねよへ正二伍石いそのかずか上朝臣磨あさありそ  
乃海なみ元明天皇げんめいてんのうハ養老ようろう立年十二月よりこれこれを發はし  
元正天皇げんぜいてんのうハ位すゑとすとすを縫ぬいひそれなり聖武天皇せいむてんのう  
ゆづりとしけしきを爲あひばゆ宇天平てんぺい十二年十

二月歎かたう坐すわの車又あり伊勢太神宮いせたいじんぐうよりびよ七  
道乃徳神とくじんより幣へいとより新あら氣きの車くるま代だいをせ給たまふ  
此こ時ときみちのちく八宮やくわくとありて共とも繫むすとこのこのよと  
びよば石いは山さん峰ほう國くに櫛くし山さんひづと左さ東ひがしと右う西にしと  
右う系くとてうか山さん乃東ひがしの川かわよ橋はしとくけれと同十  
六年二月恭仁宮やまとひのみやの原はら乃のちの山さん大根だいこんの  
と駿波すゑ乃宮のみやよとどとどめ行ゆく經くわあれを由ゆ心こころよもよま  
色いろあうざりきるもや同十七年四月徳目文とくめいふと  
を政官せいかんよりていづく行ゆくもこよゆくめひりんや  
と宣せん下くだわりうきみて四大寺よんだいじ乃僧そうより勅てきありうば  
只ただの原はらと歎かたゆく勅てきと儀ぎをと聞きと聞き  
じて飯磨はんま平津ひらづ宮ぐうとさうじと恭仁宮ひやうひのみやの市人いちじん  
と日ひよつて平津ひらづ宮ぐうよあくそひ行ゆく於お平津ひらづ矣い

行幸あるち經の時うけりて廢帝天平宝字ふ年  
又故とくへきくあまの保良の宮は國一まく同  
六年又平據えよ還車すり給ふせあり右ハ後日午紀  
よゑくうちも後延暦七年故天平安據長選よう  
院へ給ひトリセ十七年と據く平據富乃後毛國  
也ありきる三代實據ふるくより和銅三年よ  
里延寶七年よ凡九百七一年免

夏 藤原のやこりあらまようじく時あり及候  
わとゆうあら家よめ代よれ色がまくまく見えます

### 佐紀山

さひえ村の西より山をくらむあれ  
きと佐紀山をいふハ雲山物よくあり  
春月多ニ山の山をねも佐紀山よこぎり桜の花乃

佐紀山よ陵三四基ありそれ年よ神功皇后の  
陵とやそのあり即ハ此きの山代の陵もあり  
多むりりて是陵の名をなす花を後の人  
内ゆくとまの

### 神功皇后陵

人王十六代神功皇后の陵ハ大和瀬の新里あり  
代徒城能引陵也日本又後御角列池上陵也  
神功皇后十九年四月よ御山あり高少と一百歲同  
十月け陵よくする延寶七年ぬぐ凡一千四百  
八十一年り今は陵とからよ年ありよさればも石棺土  
と御輿輪草ぼう力しげよのうりうり 祀日本紀曰埴輪山  
はうてちの足東の輪支破陵よ勅使とくらうと爲の事  
かう故子をよわと

御子也さけは陵よりとてある事あざらる事とあり  
候も又多どもよからずりそれが沖より仁明天皇承和十  
年三月十八日力食時より陵のづら乃どもありて  
御氣風よりびくびくして蘭を而て飛行又車  
力附きりかて西をあて御氣是鳥事よりと  
て奏聞と經りて御主よりとて御主よりとて  
御王とけりとてよ西御主よりとて見せ  
よ陵が本七十七年を外極本ハウビシ成テム  
こうじ是陵也。御主よりとて御氣より御  
どと天皇れあやしめやま経つて圖縁と加へ  
させぬひりば椎列乃南也二の陵ハ小の神御室  
后の陵南ハ成勢天皇の陵より年よりとて  
ありと世の人南城神御室后の陵也と成勢天

皇の陵を以ひ渡して一ノバ御御室后の陵よりある  
引鐵乃くじひみど皆成勢天皇の陵より祀  
おどろ祀おぼれりて成勢天皇の陵より人  
有アリ引鐵と更ニ御御室后の陵よりへ  
納事もき記勅使ハ從四位上藤原朝長助從五  
位下源上大宿御正野よりの御氣西南より  
行へ色はくじりて類聚圖史より

### 成勢天皇の陵

人王十三代成勢天皇の陵いやまた乃御室后の都  
よりあり延喜是と從城肩列陵也以日本又沙紀  
多池那陵也古事記又從城肩列池後陵と云  
矣延喜御宇六十一年六月より崩御より終之年  
百七紀本又九十歳と云あり古事記明季年九月よ

じ陵よ納むるやうあり日本延寶七年迄一千四百九十年九

百九十年九

### 鷲塚

祚切皇后乃陵の南よ御しひくあり  
鷲塚の傍よばり金乃鷲とうけみ繪ひどりば  
名ありとぞゆゑ一色もあらば豊前國宇佐郡  
乃八幡菩薩ハ馬城峯よ石斧權現也あつまう  
の山の頂よ三門乃石也より金也乃光と  
ちゆら強ひトクバ仁德天皇勅とてともも光乃も  
せしとをしわ繪引き巴金色乃鷲也現し繪へて  
そらよ寛殿とみくらききるより巻函八幡の像  
起よ名くこうじ毛代せすよ八幡菩薩ハ祚切皇后  
乃御すよりうの皇族の陵よ八幡化粧乃金の鷲

とくがみあくべて歟母子力もあびれ御なるよ  
やく後乃人のあくあはれ川のみ

### 孝謙天皇陵

人王四十六代孝謙天皇乃陵ハちねゆ流の下  
作貴鄉高野山陵也本紀慶龜元年八月よ  
翁本紀より繪ふは年五十三本紀け陵よ御すり  
より高野天皇と色又寛家孝謙孺德皇帝也  
毛トモ本紀御也高野と字ふハ故式部少從二  
位鈴麻立乃旧宅也ありと御すりては陵の北  
とありトより鈴麻立の息三人よ加瀬ありば歎  
切とくす矣本紀延寶七年迄九百十年免

### 高野

多うのえ乃髪室ふと志貴室ふ作紀乃え

よともかひあそび繪の秋

秋されハ今をたる如あ邊よ鹿鷹山すち野の見文  
瓦器とこぎは高野の野邊の別本家皆白妙と呼むれ此文通

日葉離媛陵

日葉離媛余の陵ハ狹木之寺間陵也古夷あわらと紀

依貴山もやありタモ只狹木の名よりて書のを  
作り陵の人西みさん事間陵もの之作日葉  
離媛余の景行天皇の母右丹波主王のむとあ  
あり旧事紀仁天皇二十二年七月よからずせ  
給ふそ乃もうぬりするの時群卿とめて勅あり  
竹けら人と陵のもぐりよ埋めも事ハむくの法ま  
ごういたくはさんや野の鬼の宿ねもとをあてる帝の  
都よ傍夷余の陵よいする人と埋めりゆといふ

御いそぞくへ來乃世よかるたゞ城はくえむを  
れづちも寄ゆ乃如教一百人とりとせ寄て人馬を  
所ひよ櫛く乃抱のくらばやのくくさすりのち  
はむ乃あといそくへりく陵よ引くもよもよ  
小乃おげよりすくはさんや天皇大よ觀感油く  
てまの金内あよもよきりは暖く直憲乃が  
ゆよ作毛は勤功よりて本の姓とあくあか教  
風と経ふ是よりか教連考ハ天皇城をうぬるの波  
くくく

くくく

紀

日本

狹城池

狹城池ハ懶よ水よの池と云々葦田八幡縁起曰神  
切室底池よよもくゆりまもむももももももももも  
底と坐べて水よ地とあやもりて坐すやもも

足枝城池ハ勅仁天皇三十八年十月より作より  
ノ日本紀より又櫛波池とも云ふ  
△櫛波四年六月櫛波池より颶風もんじにて  
南苑の林二十九吹やりよりその樹化して御堂  
ありより續日  
本紀

### 超昇寺

超昇寺三代又延勝寺玄泉書ゆきうきり真妙法親  
主乃御達三又四三代天正年中より超昇今  
八船をくりうちひかりよ大日如来一龕ありしき  
ハ密法乃義園よモ御ひく里の山敷下今ハ民  
業の山窟一村乃の山也と有る  
附あきばりや白鷺池も水くれ義清宮も草木  
也や超真妙法親王ハ平時天正時三乃御子高

觀主アサヒ御飯ハ賜達三佐保物観  
主がや大同年中乃もゑよ春之内海よのがり  
鑑小世乃人跡辰太子也申事三代ありて  
後尚侍藤野觀子アサヒよ兒乃仲成アサヒに變う  
うりて春宮アサヒとありそ紀書弘仁元年九月十二日  
御年九七アサヒてゆきなりむろを給アサヒ記編年東  
大寺の道全律師の家アサヒとくとく真妙法親主と見え  
すれ家數僧故乃禪林寺アサヒ家居よ同義鑑ひく  
ハ麻園内衣の水う思思乃塔アサヒとくとく紀隆圓大德の  
僧院よもとてハ覺知一心乃悟代弘アサヒ弘  
法大師よあくさぐひくハ真言宗とそらめ給つて  
觀主アサヒ高僧アサヒりくもせわれあ紀すばくや  
文  
撰集真觀三年よ參國アサヒ經四子よりう

アラリ繪アリケルグ是は明師也とて天尊より  
アサアリ。書アリテニアのみと波天の心也と感ト繪  
ヒクお波くの寶代アリ入繪アリケルヨモキアリ。ヒ  
モミ繪モセシ由ルモテ道乃日モトテ大觀  
院三門也。あ繪アリケルモ家數ハ海部もきどモ  
友人縁の親王は思て繪モバドウ人ひきま  
シト御繪アリタリモセシ由波天モトテ師子御  
虎モヒムハアムモ我ハ是傳法乃別モノモキア  
や。別事アリ。それとて歎経モアモアリアレ。然モ  
ゆ。情アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
死アリ。抄集又三代實錄元亨松書等。ハ無處後  
宇藏アリ。本は親王羅越國。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

云云私仁元年真如親王作。唐愛アリ延寶七年歿  
八百四十七年アリ

### 念佛堂

念佛堂ハ西暦年中夏乃皆。よ油。セ清海法師。詔  
昇。寺院内。よ遠立。あり。圓方陀。の法師。い。身。の。手。け  
七尺余。ら。う。人。ア。越。く。年。の。道。と。あ。の。身。縫。ひ。う。る。が  
い。ふ。う。身。ひ。き。ん。ら。失。と。機。ア。リ。や。う。て。無。福。ち。乃  
軍。敵。小。こ。そ。れ。り。あ。る。附。す。半。よ。あ。う。そ。し。敵。事。而  
ア。リ。よ。清。海。法。師。ア。リ。ア。リ。よ。べ。死。よ。う。ひ。と。肩。よ  
け。三。尺。と。こ。う。に。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
だ。う。と。わ。よ。う。代。ハ。リ。ア。と。機。佛。家。よ。入。今。更。じ。う  
く。よ。う。り。と。ん。も。い。そ。り。れ。ー。あ。う。こ。と。そ。心。色。を。  
ね。き。と。と。無。福。事。と。あ。く。遊。樂。寺。よ。う。き。り。念。信

二昧まより入らき死ある。時香煙の手よ彌陀の像と魂じ  
絆むすびよけみたす秋兵漫まん陀羅だら乃の祈ねり迦か耶や沙石  
ク乃法師感喜うきよくど像ぞうととりて安樂らくともとき  
をむ書か又世よ清海きよ乃曼陀羅まんだらと以いハ日本才三力万  
陀羅だらや豎鷲まつしゆハ清海法師蓮座れんざ緋三浦ひさんさくの  
あ慶けいよくびよ九鼎く力万陀羅だらと圖ずんともとあふよ  
ゆそり本懐山ほんぽうさん鐵てつ行ゆきよあやーの老翁ろうありも  
翁おきなの杖くわよう死しええせせき死し小こももややしし  
くくうちねねねねようけけゆゆべべくく拂はれれししに  
白薺びやくの泥づ乃の光ひかりハ七財しちざいととの代だいよくや死し後ご落おち  
絆むすびの色いろハ寶ほう化かめめ乃のままよああづづれれ共とも觀くわん相成さうじよう死しれれ  
思おもひひととああづづるるここじじよよももええばばててくくりり死し又化女けいじよの  
死し仰あらら也や以ひハ從つ毛げありあり百万陀ばくは万陀羅まんだらももばば

香烟こうえんの小佛こぶつ洛陽らやの寺てらに今更いままたありととくくゆゆ作つくり極きわ一  
偏へん家けい而は養や上人じょうじん應おう永えい四年し十月ひ十じ日ひ超昇ちあが寺てら入い入い  
ももくも清海きよの万陀羅まんだらももじじよ香烟こうえんのゆ仏ぶつと御龕ご龕くらわ  
ありとと附つ清海法師きよの勘行かんぎやうの具ぐとと一尺二寸三指さん一  
東京とうきょう般若はん尼み守まつよ御龕ご龕くらわけけややトトの法師ぼつしのりうれ  
羽翼はよく入り又洞どうの御龕ご龕くらわ乃の像長ぞう守まつようり御龕ご龕くらわ  
ひひより小佛こぶつようととううよよ是はむむ一い真ま列れよ  
おおそそ一いヶヶ代だいハ是は西方極樂彌陀さいほうごくらく乃の化身かしん乃の佛ぶつ  
大般だい涅槃ねはん守まつ万陀羅まんだらハ我わが身みより涅槃ねはんちよ  
ううより給さええききの袋ふくろありては寺てらよ納なまま死し百萬陀ばく  
わわれてて死靈しおもも死しよ天正てんせい年ね守まつ井い戸ど若わか役やくち  
のの六ろく亂らんようりりて死しゆゆカリ靈寶りょうぼういいもも名なだだりりあ

よりと或記よかくあり

養淵朝臣寺

はち乃後とあらぞ趣舉ちの内と、見てう  
萬寺乃殿を正五位下を承御、延暦ハ年陳天皇  
乃御源高、御親王の御事あり天皇御前、うも人衆を  
筆をあらざれば御の後陵乃やうりよ一宇としまが  
会仏の比とれ、天皇乃由がと御さんもの處  
の親王のそて繪へ、趣舉ち荒廢、一筆もえれ  
のときうは聞よ一事とそん事、  
觀四み十二月廿六日勅ありて建立され、三代  
車代建く、勅觀八年二月廿八日はち乃建經の御  
よとて、ゆうの系乃内、開化十六町三段、二十七步、  
いさりよ繪ひ、三代寒鐵英銀より  
あり

菅原、趣昇寺の南

菅原ハ野鬼窟のあまが浦窟、在人か浦窟  
通長、などれともをもてあきづけん、姓氏のぞ、南  
より元仁天皇御力姓とあらわめをわる、心力  
多きハ、とて菅原姓とぞ強き。本紀ば野鬼  
窟、ハ元仁天皇の御宇野鬼窟とある、心力  
御乃樹と経へをもとぞ、日本天德日命十四世の  
孫、系、因よ菅原の地ハ推左天皇十八年より、日本  
万葉、也海がみむそこね、すり、也く、也く、紀、奈良、菅原  
古事記、家よ我世ハ、經かん菅原也、体質の里、あまく、心  
は秋ハ、神との事と、ふくね、りめありと、忠心  
僧都の勸、女往生義と、ア造像よし、まめに  
内牛飼、長井の侍、從伏見乃野、など、かず

物なりありとのせうきうりゆう乃れ  
の所りまくとすうりうる神もや又陸縁也  
ナ僧ハ伏見乃仙人ノ神とぞや尚り

菅原天神

顯注  
密勘

菅原院ハ神乃所是よりまち書ぬとぞ  
菅原相ハもやこうて一乃する後より平安傳めて  
お経ひきりあるのやうりて神御て聖廟よあ  
社もと或說もあり

菅原寺 寺領三十石

菅原もハ又喜光もとも少行基菩薩の造像よ  
しと法門の坐像と安坐して天皇行  
走りきよ如來光照城らめり繪りより  
喜光もの物也あり元和年中のもよ或和向も

で、監齋と云ひらきつよち性乃僧く物くらむ  
而能ひるよ、和齒乃筆書よからうり走行基菩  
薩の志民いばとの大も郡の人あり天平十七年  
大僧正の後行基ふこの佐行基より下田まく天平  
二十二年西月大善薩等とほふくくハ筆書よか  
うり又の況あり靈異神驗もくよぬきく薄一付  
乃人行基菩薩と云ふ額聚國史もあり同年二月二日  
はもの東南院みてとりとと年八十二秋それま  
卫延寛七年庚午九百十六年ウ

新初撰  
續  
作翁山乃ぬくよそ、とくに見る達哉の歎  
の月久くすれとせどもゆよぬけすりえう  
大德  
基

菅原伏見陵ニ基

は而乃からずよ陵ハあらモせんと雖て  
手ぬりもればよりてよ陵矣カタマリをもるや  
は陵ニ基ハひづか仁天皇乃陵西ハ安康天皇の  
陵をよ陵。ト郡齋原乃伏見よりと延喜式よ  
乃くアリ又の後よ二陵ニ基ハ葛上郡の齋原の  
依見よりありと帝王御年よとすり御と色延喜式  
よとくきよと帝王編年よりゆるよとすり  
人王十一代畜仁天皇ハ御宇九年七月より御年  
ありゆと一百四十國年十二月より陵よとすり御年  
れ日本紀又此年百四十三古事記延寶七年と凡一千

四百七十年ウ

人王二十一代安康天皇ハ御宇三年八月より御年  
卫三年の御ノ陵よとすり御年ウ日本延宝七年

至一千二百廿四年ウ

### 因道間守基

畜仁天皇乃御宇よ因道間ちとみの人あり勅室よ  
御を嘗世のゆよ少りぬモ室乃御宇九年九月  
よ御御より繪にて後因道間ち御時高葉八月こ  
ハ乞とりてつりた因道間ち天皇乃御一年正月ね  
経あげに御よりき勅としけく万葉の後  
えりびく嘗世のゆよ少りぬすとせ御ノ御  
よとすりよ天皇乃御一年正月御後ひくいげくよと  
げ前とよまんや秋け世よ生もりて御うえ  
天皇乃陵乃御よりすととどくあづれるよとすり  
が御ノそととすりと延喜日本紀又御年ウとあハ  
陵のりとすりよ因道間ち御年ウかうと御を

もく見とくよるべくぞ  
もく見とくよるべくぞ

万葉 はくらむとある歎

ナリ内ともあやよめもあらだのうもの 家持  
萬葉よりよしらまのりとニ延よりアヤヤニ  
モチマハシテアヒルヒタヒタヒタヒタヒタヒタ  
ミハシテアヒルヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ  
ヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ

ひきりゆく 後畧

及歎

そりもふ、氣を寒むのをうきどもやと行ふよか

伏見園

菅原まわ東のあらび

は里よかちの氣ありニセガタと起をわす

抱を以て時へ枕を以てひげをみる

あ。附註。うりづ附註。うりづ  
年八年行基菩薩鑿羅門僧菩提とひくて  
御もよくり給ひ。附註。あぐりてたよ寺よ入  
只因友よとあうど抱ぬど個どてよひをせが  
りきる程よ二僧もあじよとへく者とせが  
り抱板とあうとてよひけりも後註。行がふ  
程もこれより伏見の思とせひしきの跡ひどを  
附註。うりづの東大もとよきる也  
又の説。うりづの二僧金剛山と却くよきり鑿し  
附註。うりづの二僧金剛山と却くよきり鑿し  
あり是ハ又葛上郡乃伏見のやうふぞくよきる  
古今。書。伏見の經さんもうちもや伏見の里。あき雨。も。不知  
未だ。伏見の里。あき。より。と。ひ。今。の。後。ま。見。

きうち乃神のあゝとあるより又  
前編  
菅原へ伏見を乃くれよと後まば處よ由よか初秋の山  
えれうの葛上郡の伏見とあるより御山の  
内伏見よりハ小御山の山ハ三輪山よ角ど  
うりて名づけ葛上郡よりハ初秋山打見  
りすあり

真福尼院 伏見器の有

真福尼院ハ同社ハ弘文院じつ國能法師と云  
あり信重山のやりてねあくふよ晴純めて教  
授れ一すよ経院と称よみの法師りともり天  
和重慶の伏見の人あり一がその里の弘文院  
ふたあの某師の像ありのみ法師真重の如きと  
おもぬせ也と百日もあらずて乃般鏡とぞ立をも

自小鎮とゆくされば行とる冒目よとゆりて浮子  
庵野にて某師の真鏡虛舟よみり阿波源の  
寺數三十数丈珠が利多が珠經と教化て  
後年永平七の三月晦日來りやうどんの禮ふくと  
うりぬ心胸あくとつゆて二七日とてありその後  
死んで野中よ無づれどもまごとのりうばうされ  
多松やううどんの身八日よ蘿生すて極ふ國の  
経びよ汝獄らやうとてんきの仁草え年青井  
冒よとく教書その後年久しくして寺もありし  
がひどりの壁あり同地とていざ草庵作しまじて  
まことり天正年中寺門と號ひてより阿波源堂を  
立

文院の後これとぞおうきる年経く  
前編

寛永年中より同領二百石ごとある  
寛へきの初歲上級もの賈間寺西地より

くそり

是より西よ靈山寺あり遙分せらるるを  
又は原院乃南よ新田教親王乃陵あり

靈山寺 立碑百石

鼻高山靈山ちハ行基菩薩乃寺剝鼻もと靈  
山寺あり又波羅門菩提院と行基菩薩え  
どめてあひ後乃附高山ノ私遊の唐人よりなり  
て一の御歎又あざへくはち等あり縁やうカ  
秘傳と安西ぞり零落乃後弘安二年無事あり  
西ゆくよ行基菩薩乃室乃治あり

新田部親王陵

新田部親王乃陵ハ僧よ蓮華寺よりが親王死後より  
有りてハ振櫛寺の同祀もありとぞ親王ハ天民天  
皇乃御子也也ハ五百重塔紀日奉天平七年より  
後ハそれより延寶七年よりで凡九百四十六年つ  
唐招提寺 蓮華寺の南ち標三百石碑真言釋  
教よりはくく唐招提寺の名あり起於古寺ハ天平  
寶字三年八月鑑真大僧正聖教天皇戒をもめ  
庭寺よりはくく唐招提寺の名あり起於古寺ハ天平  
宝字四年八月鑑真大僧正聖教天皇戒をもめ  
てありと大僧正よ経文室塔と号むるよハ僧云  
以門心とひと仰く達多河りと我欲延宝  
七年より九百廿一年ク

徳堂

卷五

七

金堂、もろあらの僧が寔シテ、とく丈六の歎迦  
内院ナカイニ、とへど秋、その柱中より千佛とさざと背後  
よ二千牀三千佛と捨ぐ左脇シラミツに壓シテ、坐スル、はり  
ろうの風流ブンリュウの化か脚ハタマツのすと觀るま薩ハ天人の  
所ハシメ、送スル、あり秋

▲講堂ハ平海の朝集殿と於て送スル、あり、御勤め  
薩役侍の二菩薩もろあらの法力ハタマツ、乃修スル、あり秋  
食堂ハ藤乃仲云の家と稱スルてあり秋  
經藏ハもろうの義靜延スルて、佛舍利、食盒、  
菩薩經論、寶物等スルて、御勤めスル、あり秋  
總譲函家ハシメ、あよとて大藏四千二百卷と書写  
て、納スル、と見スル、とあり秋、書寫資治通鑑、写大藏  
骨索堂ハ藤清河家と施スルて不空骨索の像也

八部衆象城もろくさきくあり秋  
佛經堂ハもろ二つの思惟シムイ、にうて盤真の遺像

代スル、あり秋

起

錄

西方院の阿弥陀堂ハ中興、開山大悲菩薩の廟也

起

錄

▲開山鑑真和尚ハもろ二つ楊列龍真寺の大徳ありも  
ろく天寶二年入唐、乃僧鑾叡葉行、和尚とそ  
りて、ア佛法東流アムニシへ我本国より焉、ども是と傳  
ゆる師也、和尚自本ハシメがより、教化をす、而  
和尚ありとされ、もく揚列、よ船とし、も海上うちうり  
よこられ、けよ風うげ、もう波あらりよ船の難ハシメと  
ひくや、もぞありよ、是和尚令佛もろうきべんか  
おひき、してやく死スル、とある、わく後七年と彌々

又文海よりうらよれ波風もげまう纏とも船より  
下りあべて此よ日南よ吹けたり其財案敷  
ありぬまば和尚よりと乃酒よ入酒に波よ又  
もうこゝよ海よりち行よ勝室四年日中の仗す  
もううよ齋敷よりよ葉行ホ又渡海のやりもあり和  
尚代確字とてねけど既よ才子女曰んとどり  
もい辭役大伴宿禰古齋が船よりて東大寺よ  
來朝どり續本紀元亨紀書傳通記起ふよく  
一け三四書甚外事見どるよも祝鑑多モ祝  
書曰天平勝室六年正月十二日太宰府起  
五年十二月廿六日ノ云四月もあよ入告通記錄延承  
成襄記二月來朝ト云極将来の  
佛舍利三千粒阿育王塔様銅支櫛止觀玄義文句  
蓋燈子三斗晉王右軍支真行の書一卷成襄記曰佛舍利  
三千粒天右軍

戒壇因徑那蘭陀寺戒壇土白檀多千手像此外經論等持來ト云聖民天皇書也後  
勅よろひて東大寺の戒壇院多又板櫻寺多天  
僧都似法傳天平寶字七年み月六日よどりととひ年  
通記天平寶字七年み月六日よどりととひ年  
七十七秋又七十六歲通記鑑真和尚はみ乃大藏  
經論多文字あやま西とあらもあらうとよ日南よ  
かくわく附暑毒眼多くあらうとよ日南よ  
のあらうとより又萬種多くあらうとよ日南よ  
て見りの事多くあらうとよ日南よ  
アラウとより大名のじよあまうらうとよ  
事多くあらうとよ人ありた和尚は人千人多とよ  
あハ繪多相おつてとひを多父大臣軍よ内多

絵じよとくさのりよりて千人のかどあひけりあり水和尚の遺言よぬを慶福院寺ハ如實法載義靜お住寺ちうるや佛海傳通記より

中興用山覺盛和尚入名窮四象院仁治年中よ宮中よめて菩薩戒とうげきを施す三朝圓師乃号を給つて延長え年五月十九日をうどう後深草院の御守大悲菩薩也後乃位と云ひ

けるとぞ

像

▲佛舍利三千粒仏法傳通記は寺主一乃寶もよりは舍利ハ鑑真和尚の像共来朝の附海藏凡あらく宝舟波よゆきとんとんとくもどあひいづれじやと作天とあと金鳥龕事、艤船とや船とくげり鐵魚うくわく櫓も船もくよ

ゑぐひりとそありとこそよあらううきを云龍祚の佛舍利と云へりとよとあらめ佛法弘通の海蔵を巴あふくへくあすりあらんと則舍利と海よ入れぬき、忽うは風も前も日本のおよほもあり松根院寺建立の後うめても佛舍利といつて、海蔵の寢とせんやうりうせんえあらまうとて和尚の處なりとしとび真言教修一三密則是乃深秘と云ひがれよば龍宮塔の身よゆとあつて龍祚脣と化してはまく水よ湯もかく宝利とゆげりもあらうありうち小水と龍也と名けり社代多く舍利の護神とし輪蓋龍玉を島をば附下り日毎乃半の附よ舍利の身ひま信養今年

強そも附白淨衣乃縫むて

聖母が御札とまわら先づの龍神の化人ありと總  
桓武天皇二十年正月指揮寺すよ宮脇とくづて総  
てれ佛と讐をべ一ノ分律一部七十巻蹟一部十巻義嚴  
經一部八十巻涅槃經一部九巻大集經一部九巻摩訥  
般若波羅密經一部九巻右ハ寺よすりてゑづばよ四代  
十三町在備前國水田六十町在越前國是ハ智誠物の  
あよ蜜あくへくわより帝王編年文德天皇仁壽三年  
辛酉月圓化百七種八町四隣三百廿三步傳法圓險  
ぬづ文法實錄すあり第一の戒律さうりの事あ  
まつるそぞく

根松もの南乃をばよ薬師寺あり

薬師寺 寺領三百石

薬師もハ天武天皇白圓九年

類聚四史又東塔銘鑑支  
年又後坂抄二天智元年云

十一月宝瓶山やまひ野く海りくさきハ天皇薬師  
妙法院にうり堂塔成さんと中丸ありて一百僧と  
供養一縷ひ一々忽よゑのうよゆかと緒やと日本  
紀よ思ふうちもは伽藍カランの様とまくに御作遷  
祖廟入定して龍宮の伽藍カランのやくばつじつ一奉圓と  
詔の歎感すりくて遠まち初定ありおもあらまども  
坐も御送まことかうどて天武天皇清淨院セイジンイエン  
まゆて御心を緒ひ又後坂抄起先御の御遺勅ウヂイチツを  
とてお統天皇十一年薬師の用眼あり日本本紀文  
天皇二年十月よ薬師ウヂラヒ寺と御りぬ後日或ハ  
元年書は附ハや内ナカニの内高市郡恩木よこして、薬  
師寺と号モそ後え正天皇崩薨二年ともす  
歿うち後下敷布敷六条の二階タカヤようした二人けり今

の萬師寺是より起自開元年より延寶七年迄  
凡一年奉又顯龍二年よりハ凡八年七十一年

金堂

金堂乃萬師如來ハ天武天室乃御死十二夜立神  
觀音菩薩二軀一軀ハ孝德天皇御願は萬師如來ハ御  
本郡本萬師もより轉めて引きもぐ七日被経て  
は寺より此經由の拂起るあり又の祝より萬師  
寺乃より金毘山と以あり萬師乃佛と稱せ  
リ不ぞ貳祀より來り此經由て達戒會あり  
利嘉義二年より而ニ月一日より七日迄

とくが今より

講堂寔かて寂勝會代をこあらまへやそ作寂  
勝會八件總修師と云ふあり總和天皇天皇六年

六月廿一日は會の代よりとこあらべ延喜四年と稱る同  
九月十四日勅許あり橘廣圓乃寺四七十町とう  
乃金の料より給寂勝會表白羽翌年八月よりあ  
てゆりとこと類聚又の祝三年廿一日より廿  
七日まで行ひりうて總起表白又延喜系仁明天皇義和  
年中より宣ト有ありて三月七日より十三日  
よとつる恒例トとて總起表白又延喜系は會の儀師の布被  
被ハ緒ニ正綿ト緋毛被布女端ト前一食肉ト衣  
安二年夏上トの後は會退惣ト起固トよ大般若經  
會每年七月廿三日より而て廿九日より儀  
修トお延喜式トよくくあり又慧遠大德の年トよ  
修ト萬燈會ト書トれれて之紀三會も經

て名の主ぞめらりと死

▲西院ハ舍人親王ニ御建立<sup>元長</sup>元年七月十二日  
大地震よく<sup>起</sup>大震<sup>縁</sup>

▲東院又東禪院とも以<sup>ヤ</sup>養老<sup>九月</sup>八日長慶  
親王乃<sup>シ</sup>逃立本寺の觀音臺<sup>薩</sup>ハ孝德天皇<sup>シ</sup>造  
建<sup>エ</sup>後雷火<sup>モ</sup>そこ<sup>シ</sup>もつれ<sup>シ</sup>修補<sup>モ</sup>之銘一説<sup>モ</sup>之  
て弘安二年三月十一日又修補<sup>モ</sup>之銘一説<sup>モ</sup>之  
備<sup>モ</sup>親王元明天皇<sup>モ</sup>少<sup>シ</sup>あよ<sup>シ</sup>養老<sup>年中</sup>よ  
遠<sup>モ</sup>と<sup>シ</sup>ひづり<sup>起</sup>は<sup>モ</sup>堂ハ折<sup>モ</sup>あき折<sup>モ</sup>始<sup>モ</sup>めにあらう  
今<sup>モ</sup>あり

▲東院ハ天平二年三月よ<sup>リ</sup>て書今<sup>モ</sup>あり西塔<sup>合</sup>  
十一丈六尺<sup>縁</sup>起西塔ハ光仁天皇十一年正月雷火<sup>モ</sup>  
燒失<sup>モ</sup>本記<sup>續</sup>本寺の後<sup>モ</sup>一寺<sup>モ</sup>正月<sup>モ</sup>又

奥上の後ハ<sup>モ</sup>無<sup>モ</sup>あらず<sup>モ</sup>起今<sup>モ</sup>の文殊堂ハ西塔<sup>合</sup>  
ゆり孝德天皇<sup>モ</sup>御食堂<sup>モ</sup>食堂<sup>モ</sup>起禪師の傳<sup>モ</sup>院  
モ<sup>シ</sup>仰<sup>モ</sup>佛藍色<sup>モ</sup>綠葉<sup>モ</sup>師凍和尚<sup>モ</sup>宏壯麗<sup>モ</sup>の棟<sup>モ</sup>  
師<sup>モ</sup>の祠<sup>モ</sup>業<sup>モ</sup>ゆ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>る

▲鎮守八幡社<sup>モ</sup>は<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>休息<sup>モ</sup>也<sup>モ</sup>も<sup>シ</sup>の別當<sup>モ</sup>  
紫<sup>モ</sup>服<sup>モ</sup>宇<sup>モ</sup>依<sup>モ</sup>八幡菩薩<sup>モ</sup>勸善<sup>モ</sup>して<sup>モ</sup>朝野寺<sup>モ</sup>家<sup>モ</sup>の開  
園<sup>モ</sup>よ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>そ<sup>シ</sup>そ<sup>シ</sup>八幡菩薩<sup>モ</sup>起又<sup>モ</sup>休息<sup>モ</sup>の事<sup>モ</sup>少<sup>シ</sup>  
の身<sup>モ</sup>觀<sup>モ</sup>元年行教和尚大安寺<sup>モ</sup>八幡菩薩<sup>モ</sup>了<sup>モ</sup>  
け<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>時<sup>モ</sup>か<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>休息<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>それ<sup>モ</sup>は  
在<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>起<sup>モ</sup>松<sup>モ</sup>又今<sup>モ</sup>社<sup>モ</sup>豊臣<sup>モ</sup>も<sup>シ</sup>殿<sup>モ</sup>有<sup>モ</sup>敵<sup>モ</sup>下<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>進<sup>モ</sup>  
▲佛<sup>モ</sup>の石金堂<sup>モ</sup>引<sup>シ</sup>西<sup>モ</sup>の草<sup>モ</sup>む<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>う

モ<sup>シ</sup>あり

和

卷五

七

万葉うきの御歌十七首あり

佛足相

予輻輪相

轂轉相

具足與難相

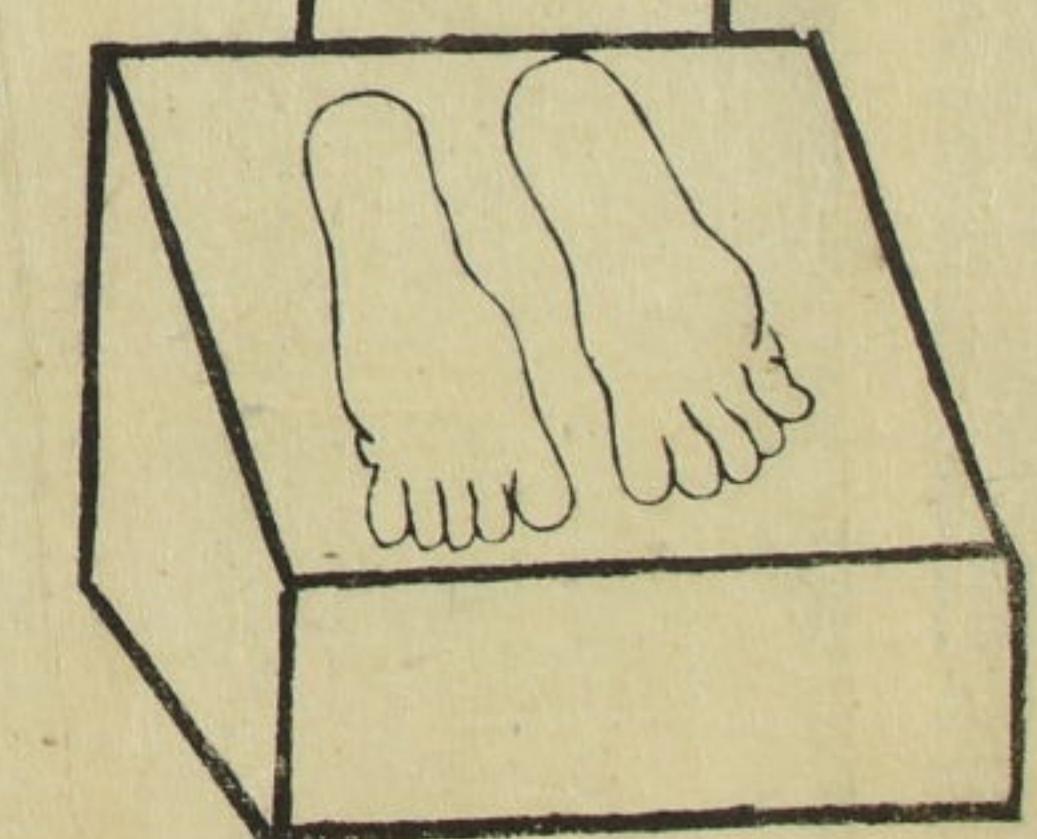
金剛杵相

毘盧亦梵王頂相

衆蟲相の故にえりげけたりは衣ハ萬師乃像山邊立の肉面歎仰とりむるは佛足相とぞとて丈六の像と釋迦坐つゝと微表もあり娑婆立石の面ナシその肉身二の總三十あまりニ乃もさりまへされりうろ人のぬりぬぞこれとそりつきくしひび遠集よのちくもととがよ三明野辰山隱ある)

あれ佛詔より経はけりとくとくうり山階ちどり萬寺ように一ねむゆゑとよらば

△小あへも八家數學よりうども行基菩薩唯識乃法門不ひうちれ戒明和尚入唐の後教法相とりてあそびきつゝりあ代まで法相家にて教言と氣くり又靈寶あまり内中よあ面力黑筒教角是も小あへ天人あまくぢりて章詔を御雪よあぐてスリ流よ御箇とぞひもと相堂と是モ訣面あり名と稱りゆりとぞひはくともちあくはのの京よ蘇の師傳士晴遠とゆきのあり還俗とゆきをすて帝よ近づふ曲うきるがたしよどんよ近づくけりけりとよ死よより寄魔王宿うてば蘇のゆようとよん半いとと築一塔がう



著生してノヨ御へて後又うせのタリ身事ハ上扇  
生木高とぞひきり時遠が先祖の事への家よ還  
候樂のゆりてあまててきりぬりゆりてとおづきを室  
代是とほくえりちるが草は鄭鄭の寒物にて  
ありとゆゆと十訓教よりうわらうなせとよくも  
ありきるもや

▲夷とへん王古十四代圓融院天延元年二月廿一  
日<sup>吉</sup>宿堂一時のうちとゆりそれが年よ金堂一字ハ  
神鎮礼家身と夷よあぐに色ひそば會の  
浦るを即ちくべ御よ失をやゑく金堂はくぐを  
あくじたれは熟切よかく<sup>ミ</sup>神德ハ三河の後師孔  
家ハ大和の後師モロヘの宣旨を経て國三度  
み目宴檢乃利波のなが美源朝臣伊達<sup>ミ</sup>國女入

日一序と一曲の後とうて作達<sup>ミ</sup>をせんのう<sup>ミ</sup>九ヶ國  
よ宣トありする年後<sup>ミ</sup>三<sup>ミ</sup>年西月八日よ  
ちゆめて相続<sup>ミ</sup>うつをきより女一年後<sup>ミ</sup>三<sup>ミ</sup>年正月十三  
年よ成輪<sup>ミ</sup>を寺家の別處<sup>ミ</sup>慈禪大德の後遠あり  
相文<sup>ミ</sup>はまご宿堂成輪<sup>ミ</sup>をがくよ承<sup>ミ</sup>祐元年八月十三  
日乃夜<sup>ミ</sup>あ夙<sup>ミ</sup>金堂<sup>ミ</sup>乃上の重閣<sup>ミ</sup>と喩<sup>ミ</sup>ね<sup>ミ</sup>うづ<sup>ミ</sup>別處  
平<sup>ミ</sup>慈<sup>ミ</sup>津<sup>ミ</sup>律<sup>ミ</sup>師<sup>ミ</sup>修理<sup>ミ</sup>してのう<sup>ミ</sup>起人王百三代後花  
園院文宴<sup>ミ</sup>二年夷とへんの年相立<sup>ミ</sup>儀式<sup>ミ</sup>ありと  
之どもとあらぐく數十年後<sup>ミ</sup>大承<sup>ミ</sup>大承<sup>ミ</sup>年モ復先  
金堂<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>金堂<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>又百八代後陽成院<sup>ミ</sup>を長<sup>ミ</sup>二年正月  
女八日<sup>ミ</sup>誕<sup>ミ</sup>昇<sup>ミ</sup>るのをかく<sup>ミ</sup>乃<sup>ミ</sup>草<sup>ミ</sup>よかく<sup>ミ</sup>て<sup>ミ</sup>うすと<sup>ミ</sup>引  
事長<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>事具<sup>ミ</sup>のう<sup>ミ</sup>棟本<sup>ミ</sup>の後<sup>ミ</sup>よりと<sup>ミ</sup>引  
やう<sup>ミ</sup>ある

無名抄

春日山界あられ葉師らあらび乃端のうすむのつる慶

## 御在所

御在所その御代あらびと徳よやうもあらりとりと西  
乃東とひよりとも有事よあくまきに徳智ふよ天平  
咸寧元年春謙天皇並御ちの宮ようての徳  
御在所と仰ぐめくまつづけ徳見か紀トあり又市  
家新書曰法とをせ経ひく御うち西のまよ御人  
ゆきと正統記よくくつりくわく右承とある  
色ひく乃右承とせむがゆ紀

## 勝間田之池

万葉集  
勝間田之池者我知蓮無然言君之鬱無如之  
右或有人聞之曰新田節親王出蘿千堵裡

## 獻新田節親王歌一首

萬葉集  
忽嘵愛於時語婦人曰今日遊行見勝間田  
之池水數濤々蓮華灼々可憐断腸不可得言  
爾乃婦人作此戯歌專輒吟詠也 万葉集

翻林採葉曰親王世よ賜アリ大鬚そおう  
けり翁よアリ大鬚そおう 戲よよもゆき

押さ池乃ち所不分明有す花は数般由よ入半難  
然万葉集よ今相遠免新田節親王大和國藤原  
宣より幽自遊遊して般花は数般由よ入半難  
免免の勝間田池乃花と云は刻奈良の  
高師寺アリ池冰縁後已よ精舍紙三毛  
水引也詠本む其謂元帝王系圖曰白風

九年十一月 依皇辰病遠あ師も是則彼池乃源と云  
詞林 桜葉被冲抄曰勝間田池とバ水絶方よりアハキドモ  
きのあ何とお爲ありの親王乃日後をじ事萬師も乃三  
免よりひだとせん色初び又萬師もハ後もゆ  
えべ御園之内池とてい井もうちもと書もり  
乃邊のあんかの知人乃アハリハシハシの寺乃近見行よ  
ハリとぞうけ経つれとてにそきハシがうど侍允新  
國都親王ハ天年天皇ナリ七年ナリ天平七年九  
月よ薨ミテテ云文忠天皇二年ナリ帝歿モ  
ナリヒトテテラキ元正天皇親君二年よ薨モ那  
奈良より化ゆきアリ

良玉 桃瀬へ浦ひりきも小勝間田乃池城にて  
折り之のくるをりと勝間田乃ハシセアリ至道

勝間田乃池とみりよか室うが屋の柳の下けあうて  
ク乃池よ冰夕紀史時ヘムシムく勝間田乃  
浦作ヒ異名よ少ひりともや今案じしは  
未ありきらむ也ハハタハタ

玄月

致枕

勝間田歌稿

高井等

集

忠

山や道乃ハリヒヤリヒヤリヒヤリヒヤリヒヤリ  
は秋の絛あるもや又義作曲絛あるも後  
あくあくおどり

は秋の羽高よ義作曲勝間田乃湯とあると云

口

卷五

六

羅城門

門乃石ハ像より事也と云ふありらのせの羅城門  
御食ノ天正年中圓の中よりうゞ人の所代  
ひたり羅城門乃像ありともや半圓窓のうち  
鑑高和尚勢力時もがくくは西よまえさん通化  
又天平十九年六月西乃なりもあゆて候あり  
ちるとぞ本紀 繰日

藥園宮

舊北ノ忍山山腰内より山頂の御代ノ也  
うけくみきさん溫町から町より山へりて  
ありと又うけくみき町より今家  
室乃文と云ひては西の舊圖書とある

ば西ハ天平勝宝元年より南カ薬園の新立書にて  
大掌今キドキと云ひ給ひより續自年免すて  
うり一ヶ代と云て萬園の左のをありうびの  
やうりうそくハ情の地をあそりぬと半圓窓  
より南より

植槐道場

侍町より内へてよびかねまつり御へりて  
植槐乃ハ情と云ふくろよ觀音堂一字あり  
植槐乃通陽ハ船洞ニ年十月度云款の事達  
とゆふくろ維摩今と云ふくろ給ひ西あり款  
古代安寧の觀音菩薩ハ本像ゆて房前大屋敷  
致乃佛高度寺の觀音ありとどく此へりかとお  
りぬりか船洞ニ年より延寶七年まで凡九百七

十三年秋在るじつに植櫻たりよりよほす  
人あり大鷦の御像二尺守多兵とてあり敵とて  
へやく怪しありてやもひが史婦ありて  
後ひもあひどりそ候きるをば垣ハ敷くづて  
卫門丹喜乃み代かやがまに壁ハ事のゆりつ  
てりふぐ白板はねりうそよりかよ兩なり風  
乃も死すもゆる人をあくとあうきよほだへ  
きりけよ大鷦乃像よりしづくとぞいのりき方せ  
よもむくらやありさんとありてうちもそくにうよ  
ぬとこありうりか枕乃夜赤色ときよ面よ紅  
柳と鶴とも桃紅乃朱うりをあくつゝ身よ纏  
縁と幕とあきども柳盤のまざれおりきにあと  
ハおひとんみの御脣乃手ももどうよあまくば

一別き力暁のあれをよそへ身めを蓄  
のちだり偕老のしげびよりあくと無へされお  
里歎一玉ねくわあくまのえぬおどりよ蓮の意  
浦ゆきの風もさく行の扇をうそを又心ひる  
終やありさんふとそくとぞうりうりよ身にま  
ねきども調一ねべよもあくをあくとね文あくめ  
こひあふとさかく廻紀ありづよあまくあまく  
大鷦のすへよ物でぞよげれきり柳よ相ぬり破壁  
の風きく割神う乾鍋湯筋をぬるより色今  
のあくまハ柳そゆうりきめやうく牛の財のよざよ  
門へくもありあらじや柳すうとひくよぬまば里  
人ちあくとほりてぬらうとものりとかくよとてども  
まうじに病舊の衣を着て趣とのべ轍魚兩津ぬ

て屢々温おもかをやらんそあくめほひの人のまねぬ  
おこえをせうりあらふあへんが大蛇善薩おと  
まへよもあらきんきハきのひとをせうりける  
縞しまと大蛇乃原のうへようりてありきりとぞひと  
きうきくそひきうれめでう紀洞くに像ごもゆゑ  
と縞ふこそりるゆけき

取意

卷濃山二基陵 植櫻えさの南

ひはき乃時代の陵ささよりあらむけよがりゆよしめびと  
せあり

### 大塚

ぬばうハ聖德太子の白塚しらづか丸とめわいは代  
うけまうふあり御山みやまもあり太子あのかりよ敷ひら  
けとせありゆ草くさとあうば

卷濃山うちもふり坪ひづか小泉村の南のもづき  
よ赤あか塚づか乃基いきあり義隣ぎりんち乃むりより

赤橋あかばしハ物部守風ものべまことと跡あとり人ひとありうりハ日木  
紀きより

卷尾寺 小泉村の坪ひづか乃山

卷尾寺まきの延喜えんき西卷尾寺又山号さんごうハ神院洛山らくさんはゆか  
くもり御院洛山らくさんはゆかりとて今人いまひと親王しんのう乃御建立ごじてん

ゆりとて折とき王林おうりん親王しんのう乃御建立ごじてん

自家やわらの像ぞうと人縲ひとゆきのあり

卷尾寺御乃僧ごそうすやうりハ山號さんごう重おも松尾まつおと同神どうじん  
ひりちうあらうべ大已おおなま寺作さくの山号さんごう大年だいねんの神かみ乃  
ふ太山おおさん昭あき乃神かみかづく一いち也や汝汝十じ萬まん財ざい林りん松尾まつお

よひすれり 神目年紀より

矢國寺 棚尾寺の北

卷五

金剛山寺僧よ矢國もとま家堂塔あまくあり本  
多ハ地蔵菩薩あり天民天皇乃勅御開山ハ能西  
僧正源起け僧正ハ安明天四年七月より一月より  
玄奘三藏よ喰鐵いはとよもじ海舶乃後白周斧  
三月僧正より欽書拵地蔵菩薩ハレシテ是より  
滿衆上人とぞ戒行やんじとぞ死ひてあり霊臺  
と仰極げき乃ちきりよりきり也こゝとあらじ紀人と  
身ハ朝廷こうていよりありあらうす由ゆゆき之歎魔玉文  
よそあそびきりある時矣立たつを紀宣のぶ矣  
乃世の死生罷めぐらすめぐらその罷めぐらりてめぐらが取残  
すめぐらすめぐらる事こともあらずめぐらすめぐら財主ざいし王乃西山にしざんの菩薩

戒とうけを修すもあら也わ參さんを裳きぬ玉たまの御入  
ども信府しんぶの戒師かいし御ごそん、藍あいもととて戒師  
友とも戒葉純淨きみやくじゅうじやう乃人のありと參さんを裳きぬ玉たまの御ご  
おびまされ則まことに藍あいのよ人ひと乃りとて行ゆてあらの  
事こと仰ありとよ人ひともやゆくゆぎ藍あいとを行ゆてあら  
數かず五ごつりとくとくうけ菩薩戒ぼさつがくとうけ修しゆして後  
あふりハ布施ふせよゆくゆえん上人じょうじんと地獄じごくの苦報くほうと  
ゑんこ戒かい御ごれ則まことに裳きぬ玉たま上人じょうじん戒かい將まわて行ゆ給  
ひひりりうぬよ阿龜あくま御ごりりもくらひくらひてくらひくらひて鐵てつ  
門もん内うち内うち金きんの焰ほと吹ふきびきを山さん火ひ劍けんの枝えだと  
吹ふききてて外ほか交かわ火ひ劍けんの  
兵ひょう生なまうよくく成なまあらぞそれぞ中なかよ法師ほうしひとりの

よこえらりありそりひりあきがまや身よ三衣と海  
いふぐるく草よさあらうとせば残の色燈籠  
養簾より底生乃若よりつてくわらうとを  
うくかゆきども織の底生、ひもすよだより  
母妻婆世風よろりて相よ織としどりめよ又  
くの志とくらま事とくきよ人拂れして立ぬ  
らくよ冥使うりゆり乃船川とよんよむる  
相妻婆世風よろりてう乃船とひくきの白雲  
みちうりうりとるよあくびひくみゆるりと一生  
漁工とぬまじゆきバ化人乃まうりてたうり  
きるとぞ長め人今ちを移す地移ることあり起又  
上人のりとお若と薄幸みのゆゑとあるきとあり

後、滿承上人とぞりに書祝  
▲小野篁ハ峯守の恩仁壽三年ト卒モ年卒七  
長六尺二寸破軍軍刀化體とぞり小野  
河上陵 東明寺 矢田ちの丸

鷺山東明ちの舍人親王乃御建ちやうつ葉蔓  
墨

河上陵 東明寺のうとう  
にわく村乃あよ陵又かむ地場と名ト一毛  
あり富緒川の川上をさばりあまくやむ  
乃陵とんり  
川上陵ハやぬともかみ源下都より 賀白藤原  
川上ノ陵と延喜式 ようきり

西大寺 小畠村の丸寺領三百石

西大寺ハ孝謙天皇乃勅<sup>レバ</sup>天平勝宝元年より  
由りて油り十七年代<sup>レバ</sup>く天平神護元年と  
ありぬ捨亦孝謙天皇ハ<sup>レバ</sup>野天皇と<sup>レバ</sup>ありた  
さき<sup>ハ</sup>多<sup>シ</sup>野寺と<sup>レバ</sup>又仁明天皇ハ<sup>レバ</sup>もと<sup>レバ</sup>と<sup>レバ</sup>  
あ<sup>ゲ</sup>あ<sup>ス</sup>を<sup>レバ</sup>也<sup>レバ</sup>燒<sup>シテ</sup>兜率<sup>天宮</sup>天寧<sup>モ</sup>ね<sup>レバ</sup>も<sup>レバ</sup>き死<sup>レバ</sup>類  
史<sup>国</sup>南山ハ<sup>レバ</sup>新<sup>ハ</sup>常<sup>ハ</sup>騰<sup>シ</sup>也<sup>レバ</sup>或<sup>ハ</sup>常<sup>ハ</sup>流<sup>シ</sup>也<sup>レバ</sup>も<sup>レバ</sup>有<sup>リ</sup>  
至<sup>シ</sup>後<sup>ハ</sup>寢<sup>室</sup>般<sup>僧</sup>都<sup>は</sup>ちよ修<sup>テ</sup>三<sup>ヶ</sup>巣<sup>キ</sup>と<sup>レバ</sup>ひろめ  
難<sup>き</sup>ト<sup>レバ</sup>あく<sup>レバ</sup>作<sup>リ</sup>作<sup>リ</sup>作<sup>リ</sup>常<sup>ハ</sup>騰<sup>ハ</sup>人王<sup>ハ</sup>十  
二代<sup>ハ</sup>源<sup>氏</sup>天皇弘仁六年より卒<sup>シ</sup>實<sup>ハ</sup>敏<sup>ハ</sup>ム  
十<sup>メ</sup>文德天皇承衡三年より卒<sup>シ</sup>實<sup>ハ</sup>敏<sup>ハ</sup>ム  
傳<sup>ハ</sup>新<sup>書</sup>二<sup>メ</sup>三<sup>メ</sup>卷<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>

四天王ハ長<sup>タ</sup>久<sup>ス</sup>乃<sup>レバ</sup>洞<sup>像</sup>と<sup>レバ</sup>天平神護元年より  
ある<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>中<sup>モ</sup>増<sup>長</sup>天<sup>モ</sup>一<sup>軀</sup>と<sup>レバ</sup>も<sup>レバ</sup>有<sup>リ</sup>

ヨリ<sup>ハ</sup>七<sup>日</sup>よお<sup>シ</sup>ひ<sup>ム</sup>と<sup>レバ</sup>天皇<sup>ハ</sup>の處<sup>モ</sup>天<sup>モ</sup>慶<sup>モ</sup>  
行<sup>ハ</sup>章<sup>モ</sup>ヨリ<sup>ハ</sup>腰<sup>モ</sup>功<sup>モ</sup>勲<sup>モ</sup>と<sup>レバ</sup>事<sup>モ</sup>如<sup>シ</sup>般<sup>モ</sup>作<sup>リ</sup>ト<sup>レバ</sup>  
佛<sup>モ</sup>道<sup>モ</sup>ヨリ<sup>ハ</sup>浮<sup>シ</sup>洞<sup>モ</sup>と<sup>レバ</sup>よ<sup>ク</sup>ん<sup>モ</sup>だ<sup>シ</sup>ア<sup>リ</sup>ト<sup>レバ</sup>  
以<sup>シ</sup>み<sup>シ</sup>像<sup>モ</sup>と<sup>レバ</sup>發<sup>ハ</sup>リ<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>ば<sup>ハ</sup>ナ<sup>シ</sup>ま<sup>テ</sup>  
像<sup>モ</sup>車<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>ト<sup>レバ</sup>と<sup>レバ</sup>之<sup>モ</sup>能<sup>ハ</sup>い<sup>シ</sup>事<sup>モ</sup>も<sup>レバ</sup>増<sup>長</sup>天<sup>モ</sup>  
と<sup>レバ</sup>之<sup>モ</sup>成<sup>ル</sup>物<sup>モ</sup>一<sup>絶</sup>に<sup>シ</sup>ヨリ<sup>ハ</sup>教<sup>今</sup>乃<sup>レバ</sup>觀音堂  
乃<sup>レバ</sup>四天王<sup>モ</sup>先<sup>モ</sup>利<sup>ム</sup>

觀音堂ハ延寶二年より建<sup>ヒ</sup>立<sup>ヒ</sup>丈六<sup>モ</sup>乃<sup>レバ</sup>觀音<sup>モ</sup>  
立<sup>ヒ</sup>標<sup>モ</sup>は鳥羽院乃<sup>レバ</sup>御<sup>モ</sup>御<sup>モ</sup>て瀋陽<sup>モ</sup>年<sup>モ</sup>代<sup>モ</sup>給<sup>シ</sup>  
ひ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>其<sup>モ</sup>も<sup>レバ</sup>薩<sup>モ</sup>物<sup>モ</sup>と<sup>レバ</sup>是<sup>モ</sup>有<sup>リ</sup>て<sup>シ</sup>お<sup>カ</sup>守<sup>フ</sup>う  
ひ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>其<sup>モ</sup>も<sup>レバ</sup>觀音<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>び<sup>シ</sup>四天王<sup>モ</sup>文<sup>モ</sup>  
奉<sup>シ</sup>宇<sup>モ</sup>其<sup>モ</sup>も<sup>レバ</sup>仰<sup>シ</sup>堂<sup>モ</sup>其<sup>モ</sup>も<sup>レバ</sup>有<sup>リ</sup>と<sup>レバ</sup>也<sup>レバ</sup>

像ハシマと史ヒをく語りぬタラシム也タラシム

記メモリ

愛深堂は愛深殿主、化人ハジンの假ハシマとをゆきばる  
弘仁四年七月廿日落成。降伏乃山ゆきあり。よ勅  
彼見森に西大寺よりしづくもやく降伏の法と總  
丈丈死スル。每三日御守り碑モウスル。よあくして真正  
菩薩ボクサ。別男山八幡宮より七麁シナギ。禮セイなり  
備摩ビミ乃タナリハキ。よまち詮ミハシ。乃山背アシカニ。一ノ僧  
僧シヨウ八百人ハチヒジロ。詮ミハシ。声ヨメ。毛モ。寫ヒテ。そ。ま。け。済シヨウ  
東ヒガの成冠セイハタ。よ。詮ミハシ。失シテ。而アリ。御ミツ。太宰府タツエフ。郡クニ  
金カネ。濟シヨウ。而アリ。異賦イハツ。と。跡シラフ。されみ。東大寺ヒガタニ。方カタ  
丸マル。の。矢ヤ。う。き。く。ら。く。さ。う。後アフタ。は。那王ナウ。よ。持ヒテ。の  
矢ヤ。あ。く。ぞ。と。や。け。財カネ。も。び。よ。僧シヨウ。乃。織シテ  
三巻男山ミツツカニ。八幡宮ヒガタニ。よ。奉タマシ。總ゼン。あり。と。そ。難名ミツナ  
起ヒタチ

塔タツの礎シヨウは礎シヨウあり。而アリ。方カタ。よ。ゆ。ぐ。ら。を。く。う。ぞ  
寶龜ヒカル。元。二月。西大寺。萬塔ミツタツ。也タラシム。の。石イシ。ワリ  
一丈余。あ。川。さ。か。た。き。と。東大寺。の。ひ。く。飯國山  
より。と。あ。か。く。家。よ。引。き。る。が。財。よ。峰。多。あり。あ  
や。し。み。如。佛。ト。め。ま。く。る。一。室。不。あり。一。つ。よ。ま。ち  
持。空。う。ん。ぐ。く。や。墨。石。ゆ。て。と。そ。ら。く。は。獨。あ。ん  
と。す。あ。く。バ。や。紀。風。す。る。べ。れ。と。お。ゆ。く。り。薪。と  
つ。そ。火。と。う。け。酒。と。そ。く。か。り。と。三。十。石。よ。ま。り  
終。よ。碎。破。と。て。所。々。と。か。り。て。後。ハ。道。わ。く。う  
よ。あ。り。き。り。く。経。あ。う。ご。と。て。帝。少。翁。や。み。す  
御。え。れ。ば。原。乃。も。く。つ。よ。ふ。く。え。あ。う。翁。と。序。破。代  
ひ。う。い。澤。地。よ。あ。り。め。代。を。き。と。本。紀。今。東  
あ。み。も。ま。よ。は。石。あ。り。と。秋。書。よ。か。く。う。り

▲真正菩薩の塔ハ興院と云ふ西大寺真觀二年  
乃圓滿より後く三百七十八年滅絶て嘉禎二  
年真正菩薩更よちる終く中興開基となり復  
そとハ數多の恩因上人とぞ下侍しげ正安二年  
壬七月三日真正菩薩と謐一塔ひま<sub>帝王</sub>海<sub>編</sub>御  
真正菩薩八年十一歳て家代をもき醍醐山<sub>海</sub>御  
賢の宝<sub>也</sub>入てうらむ祕事とゆあびりろ  
めの鑑<sub>也</sub>の秘とあらひく律戒とあの<sub>也</sub>よ  
せよ戒師やあらざりきん嘉禎二年同志四人  
三徒<sub>也</sub>うちりひとくして、具懸戒<sub>也</sub>西觀とす  
け律儀の紀綱とほき<sub>也</sub>修<sub>也</sub>それより西大寺  
よ<sub>也</sub>て戒<sub>也</sub>さうりあり寛元三年<sub>也</sub>信<sub>也</sub>の  
文<sub>也</sub>沙汰戒<sub>也</sub>とさげきく<sub>也</sub>建長元年<sub>也</sub>同<sub>也</sub>

内慈善<sub>也</sub>大比丘戒とゆげきう教<sub>也</sub>承<sub>也</sub>り  
はくは毎<sub>也</sub>は<sub>也</sub>寺<sub>也</sub>あるとぞあま<sub>也</sub>起<sub>也</sub>又<sub>也</sub>  
かよ<sub>也</sub>修<sub>也</sub>禁<sub>也</sub>断<sub>也</sub>とく事一千三百六十ヶ<sub>也</sub>和  
叔又文應<sub>也</sub>上<sub>也</sub>真正菩薩とくや油<sub>也</sub>給<sub>也</sub>て  
宮中よめて菩薩の大戒とゆぐり<sub>也</sub>給<sub>也</sub>記<sub>也</sub>承<sub>也</sub>  
祀<sub>也</sub>とちづめ戒<sub>也</sub>とさげきる人力万七千人未<sub>也</sub>寺  
五百九十余ヶ<sub>也</sub>寺<sub>也</sub>起<sub>也</sub>正應三年八月廿六日西大寺<sub>也</sub>  
とりととく<sub>也</sub>年九十<sub>也</sub>書<sub>也</sub>

▲道成會ハ三月十五日儀式延喜式<sub>也</sub>あり前の  
ばかり終<sub>也</sub>けりや<sub>也</sub>而<sub>也</sub>當代每八月十八日より  
七ヶ日光明<sub>也</sub>あ言<sub>也</sub>と勅修<sub>也</sub>と是ハ文永年中より  
ちよりけふとぞ

▲寔上ハ承和十三年十二月十一日<sub>也</sub>續日本<sub>也</sub>又真觀

力大日<sup>アサヒ</sup>てりよ西大寺の洞<sup>アマニ</sup>からとろげぬ<sup>アラシ</sup>る  
きより後<sup>アフタ</sup>かづとりちゆうきもるより真觀の  
宮<sup>カニ</sup>よりのちくき<sup>アリ</sup>帝王<sup>アマニ</sup>又真觀<sup>アマニ</sup>二年よ美上<sup>アマニ</sup>  
縁文起

▲ 豊心丹<sup>ヨウシンダン</sup>信<sup>アシス</sup>よ西大寺と云はば<sup>アリ</sup>傳<sup>アラシ</sup>來<sup>アマニ</sup>め方<sup>アマニ</sup>す

人曰西大寺豊心丹ハ禪師<sup>アマニ</sup>道宣<sup>アマニ</sup>もあ<sup>アリ</sup>承<sup>アマニ</sup>微元<sup>アマニ</sup>

年よ是沙門天王<sup>アマニ</sup>より補心丹<sup>アマニ</sup>の方と云ふを記<sup>アリ</sup>  
今和廟<sup>アマニ</sup>と云ひりと傳<sup>アラシ</sup>統記<sup>アマニ</sup>よ乃<sup>アマニ</sup>より西大寺  
豊心丹<sup>アマニ</sup>とてこそ仰<sup>アマニ</sup>め道室<sup>アマニ</sup>内<sup>アマニ</sup>傳<sup>アラシ</sup>方<sup>アマニ</sup>禪院<sup>アマニ</sup>  
よもをあると云ふ御<sup>アマニ</sup>醫書<sup>アマニ</sup>よ補心丹<sup>アマニ</sup>の邊<sup>アマニ</sup>  
て人是<sup>アマニ</sup>と云ひり豊心丹<sup>アマニ</sup>ハ別<sup>アマニ</sup>方<sup>アマニ</sup>とぞゆえ<sup>アマニ</sup>行<sup>アマニ</sup>  
或<sup>アマニ</sup>人<sup>アマニ</sup>よりきの島山<sup>アマニ</sup>内<sup>アマニ</sup>仰<sup>アマニ</sup>人<sup>アマニ</sup>而<sup>アマニ</sup>紀<sup>アマニ</sup>停<sup>アマニ</sup>  
乃<sup>アマニ</sup>あゆと頃<sup>アマニ</sup>と云ふ時<sup>アマニ</sup>よりあ<sup>アリ</sup>内<sup>アマニ</sup>秘<sup>アマニ</sup>方<sup>アマニ</sup>と云

▲ 西大ちるの柳の條<sup>アマニ</sup>ハ寺より東をまよひ<sup>アマニ</sup>がたり  
とくひほへきる

古今<sup>アマニ</sup>西乃大寺の柳<sup>アマニ</sup>城<sup>アマニ</sup>あは

夫木<sup>アマニ</sup>あさみどり<sup>アマニ</sup>あらり<sup>アマニ</sup>とて白翁<sup>アマニ</sup>と云ふをきく春<sup>アマニ</sup>柳<sup>アマニ</sup>通昭<sup>アマニ</sup>

僧正<sup>アマニ</sup>殿富門<sup>アマニ</sup>院太輔<sup>アマニ</sup>

### 西隆尼寺

西隆尼<sup>アマニ</sup>乃<sup>アマニ</sup>法<sup>アマニ</sup>也<sup>アマニ</sup>モ西大ちの乾<sup>アマニ</sup>よ

尼が名といふ所ありありあまうり所や  
西隆尼寺ハ高野天皇乃ハ創西大も乃衣僧力  
法衣と洗濯の所ありし也

三代  
実錄

秋藤寺

西大も乃北奇領百石真言宗

秋藤ち、萬師如來と安置也光仁桓武天帝乃初  
記香木開山ハ善殊僧正と或家疏よ乃くそりは

僧事と唯識家経海東よは心めくじ事をもむ  
因明論よびしひくハ油あくよあく瓶あくも延

暦十六年四月よとつりとどり年七十立

歿

香木ハ寺内より井あり舟ねり乃祠をもめて  
龜ととづ常よ人見る事滅えどそのもや代行  
ぬるよ山樹小雲極乃香木阿署梨もくう  
よこすりた枝ち乃大德元照よ太元師乃靈像

本後紀  
歿書續日

松濤代うけ代代海別乃後小雲極乃法林ちよ  
ては法代ととゆひ乃繪ひ一本後紀  
はやう御事よあり曉乃あり絵ひ一本後紀  
牛のうちよ大元明主の神像うぐく帝曉のこ  
もとようけり繪すくやそきどり後七日乃法修  
ハ常曉阿署梨とあるきてと香木記よゑくう  
とき中供法乃監觸ハ兼和元年弘法大师りお  
うの肉道場よみぞへて宮中ト吉喜院と  
てく曼陀羅と修法せんと參國あり勅許よ  
ぬを毎正月一七日絵うぎりてそこからく鎮護  
國家立穀豐饒めあとぞゆく一後七日の法修法  
是あり後日本後紀歿書は參林ハ性靈集よくくあり  
モ後大元秘法と修さんと常曉阿署梨參國代

源氏ノモトヨテ承和七年より勅符あり  
後日本恒  
平家ノ事後七日乃此修法ハ大元乃法事  
物語尙曉ル事新書より

▲當寺ハ保延元年六月より歎上を後典真あり

秋藤

麿字名所集より平群教とあり流の郡  
利

王二

草根  
老尼の生伊豆山也やらしき人松原の里より  
伊豆山也よりねづかうに雪の事とある墨より  
はれよ津冰のあざれあり伊豆山也より

新古亭

外山里

軒の下山里や財田ん伊豆の雪の事より  
高山八幡外山里のちる乾

西行  
法師

滋の下郡も山八幡宮ハ聖武天皇もあ國宇佐郡  
彦根城内ハ幡宮薩と東大寺よりじくこせぬふの山  
げば西よみぞくそくすもせ餘ひ一からもゆ  
よやくろくとく今よりと或だよのきたりひと  
おほつうくは附りさく、續目が死よくうくわ  
その跡よハ幡神社と平群郡よりじくくとくと  
侍毛毛山ゆく人ちばれ色平群教よりありきる  
トやうくべ

村園墓

石碑

村園の墓や處その處下郡より贈正一位安  
信命婦の墓と延喜寺あり

延喜式神名帳添下郡十座 大四座 小六座  
矢田坐久志玉比古神社二座

菅原比賣神社ニ處

危紀神社

菅原神社

登麻神社

伊射奈岐神社

添御縣坐神社

和列舊跡凶考卷五終

